

竜馬がゆく

映画文学人生論

原作：司馬遼太郎（1962-66年『産経新聞』）
脚本：水木洋子（1968年）NHK大河ドラマ
出演：坂本竜馬 北大路欣也 西郷吉之助 小林桂樹
武市半平太 高橋英樹 大久保一藏 土屋嘉男
桂小五郎 高橋昌也 勝海舟 加藤大介
高杉晋作 和田浩治 おりょう 浅丘ルリ子

幕末には日本人は実在しなかった

幕末日本の歴史を私は主として『竜馬がゆく』から学んだ。黒船来航から明治維新までの十五年間、年号がころころ変わって、登場人物多数が入り乱れて大事件が続出する。

日米和親条約締結、日米通商航海条約締結、安政の大獄、桜田門外の変、坂下城外の変、生麦事件、蛤御門の変、馬関・薩英戦争、薩長同盟、大政奉還、戊辰戦争など——まぎらわしいが、この小説を何度も読んでいううちにほぼ頭に入った。

作者司馬遼太郎の文章がわかりやすいせいもあるが、読者の私にもこれだけ複雑な歴史を理解する土台のようなものがあつたと、今にして思う。

その土台とは小学四年生の頃、愛読した立川文庫の『猿飛佐助』である。買ってもらつたのではなく、大正時代からずっと実家にあつた古本だ。すこしこじつけのようでもあるが、『猿飛佐助』には『竜馬がゆく』に通じるものがあると思う。

たとえば、竜馬がはじめて江戸に出て、土佐藩下屋敷の新入りになったとき、態度が悪い、生意気だと、先輩たちからふとん蒸しにされかけたことがある。灯が消され、闇の中で竜馬はとっさに桃井道場塾頭の武市半平太をねじ伏せ、身代わりの簀（す）巻きにしてしまった。

『猿飛佐助』にも似たような話がある。武市半平太のように身代わりにさせられたのは暴れん坊の三好清海入道だ。



竜馬がゆく

映画文学人生論

猿飛佐助と坂本竜馬には講談のヒーローという共通性があるが、歴史的人物としては比較の対象にはならない。佐助は戸沢白雲斎のもとで修業して、真田幸村につかえた猿のような架空の人物だが、竜馬は実在した日本人だ。

『竜馬がゆく』には講談プラス歴史文学の面白さがある、たとえば、幕末には日本人は実在しなかった。幕末で日本人は竜馬だけだったという。

「人間はなんのために生きちよるか」と竜馬は寝待ちの藤兵衛に問うた。泥棒の藤兵衛も架空の人物で、そんなことは考えたこともない。「事をなすためじゃ」と竜馬はいう。

「ただし、人の真似をしちやいかん」。竜馬がやろうとしている事とは海軍学校をつくること、そして、勤王浪人や諸藩の下級武士を海軍学校に入れて軍艦や商船の操法に馴れさせたあげく、その船をもって西洋式回船問屋をやり、国内の諸藩貿易だけでなく、海外貿易をする。

また、海軍学校の分校を朝鮮と清国（中国）にもつくり、日本、朝鮮、清国の連合艦隊をつくって洋夷侵略からの防波堤とし、さらに三国の連合政府をつくり、ヨーロッパとアメリカに負けない文明を作るという雄大な構想だ。

竜馬が暗殺されて、その構想通りには事ははこばなかった。現在の日本には海軍はないが、貿易で竜馬の構想の一面は実現している。

なにをくよくよ川端柳水の流れを見て暮らす